大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# 古川薫『漂泊者のアリア』に学ぶこと（1990年、文芸春秋社）



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-03-08<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 土井, 洋一<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.24729/00003535 |

《研究ノート》

# 古川薫『漂泊者のアリア』に学ぶこと

（文芸春秋社、1990年）

土　井　洋　一

『週刊朝日』の書評で、松永伍一が古川薫著『漂泊者のアリア』を推奨していた。学者がまとめた伝記と違い、作家らしい豊かな想像力を駆使してオペラ歌手、藤原義江という人間の内側に潜む業と深い悲しみを凝視しつつ、その全体像に迫った好評伝らしい。藤原義江について、私は世に広く知られた程度の知識しか持ち合わせていない。ただ、彼は腕白盛りの少年期のいくばくかを、巣鴨の家庭学校で過ごした。そのあたりの著者の描きかたに特に関心があって、早速読んでみることにした。

私にはこの点に関する情報はほとんどない。『留岡幸助著作集』や『人道』巻末の「人物索引」に彼の名はないし、彼について書かれた文章も、留岡幸助がどこかの講演で彼の社会的な成功を喜び、声援を送っているものが一つあるだけである。他に『留岡幸助先生生誕百年記念』（1965年）という小冊子の中に彼の「裸のままの先生」と題する記念会でのスピーチ速記が残っているが、これは当時をリアルに物語る資料とは言えない。しかし、そこで簡単に触れた自己の生い立ちは、この本の中で克明に描かれている。この本を読んで、私は彼のすさまじいばかりの生育史の全貌に初めて触れることができた。

藤原義江（1898～1976）は、スコットランド出身の貿易商ネイル・ブロディ・リードを父に、琵琶芸者の坂田キクを母に、下関市で生まれた。自分の本当の子かどうか疑わしいという理由で、認知を拒む父が母に渡そうとした莫大な手切れ金は、仲介した花柳界の無頼漢に全額横領された。 母子は追われるように九州の若松、博多、別府など、各地を転々とする。２歳の時、

若松の石炭問屋の社長に預けられ、6歳になると大分県国東町の西林寺(浄土宗)に小僧として引き取られた。住職の赤松恵順はこの子に自分の一字を取り、さらに親孝行するように願って「孝順」の名を与えた。

"青い目の小僧さん"は壇家の人気者でもあった。和尚の後ろに座って木魚を叩く姿は何とも愛くるしかったし、お経を読ませても住職の声以上に良く通った。ひょうきんで腕白な義江は、いつでも及木将軍の役をしてステッセル役の子をいじめた。あまりの乱暴ぶりに苦情と反感が寺に相次いで寄せられる。とうとう寺を出されて、近くの杵築の料亭で働いていた母のもとに帰されてしまう。

料亭の主人、藤原徳三郎は自分の子として認知届けを役場に出すのだが、幼い義江を座敷に出して軍歌やお座敷唄を歌わせる。見かねた客の一人に、金光教の熱心な信者で水野松次郎という鉄工所主がいた。母キクの承諾を得て(その時の母の態度は幼い義江に衝撃を与えた)、水野は8歳の義江と養子縁組をしたが、水野家には既に養女がいた。水野の妻は事あるごとにこの養女と、同年の義江を差別扱いして義江につらくあたった。

結局ここにも居られず、3年後には大阪の祖父宅、叔父宅に引き取られ、学校にも行かしてもらえぬまま会社の給仕、質屋や帽子屋の丁稚、天理教団の給仕、貿易商社のボーイ等の職を転々とする。叔父の目当ては、義江が稼ぐわずかばかりの給料であったが、持ち前の反発心と腕白ぶりは一向に改まらず、どこもすぐに解雇された。しかし、最後に勤めた神戸のサミュエル商会が縁で、彼のそれまでの逆境は大きく転換することになる。

同商会は彼の父が下関の瓜生商会にいるイギリス人であることを知る。そして、「どのような事情があるにせよ、日本人に生ませた子を放浪させている無責任な態度は、同じイギリス人として黙視できない」と思った。同商会の計らいから、11歳の義江は物心ついて初めて、単身下関の父に会いに出かけた。だが、瓜生商会社長の瓜生寅を介して出会った父は、義江の甘い想像を打ち砕いて余りあるほど冷淡であった。瓜生は、父リードとも相談して彼を東京の自宅に引き取り、暁星学園小学部の4年に編入学させることにした(1909－明治42年秋)。

良家の子弟が集まるこのハイカラなカトリック系の学校は、それまでの義江の環境とは全く異質な世界であったが、ここでもすぐに彼一流の“わるさ”が頻発した。編入学してすぐの11月4日、折から朝鮮で暗殺された伊藤博文の国葬が行われた。整列していた暁星の生徒達の前を霊柩車が進んでくる。その時、三列目にいた義江が車をよく見ようとして背伸びしたとたん体勢が崩れ、押されて前の生徒の列が乱れた。近くにいた陸軍の将校が飛んでくる。学校の神父も慌てて飛んできて大騒ぎになった。

この一件は学校関係者にとって、許しがたい恥さらしに映った。義江はわずか2カ月で退学処分になった。他に、校長の背中に貼り紙をした、いつもハモニカを吹いている、浴室でパンツを脱ぐ（脱いではいけない規則があった）等の「他愛ない理由」が並べたてられた。

義江と家庭学校との出会いはここから始まる。母親が引取を拒んだので、困った瓜生は家庭学校に義江の教育を託したのである。著者によれば、そこは「始末におえない名家の子弟を預かるキリスト教系の私立感化院といった学校」で、「ここで二年間、厳格な校風に押さえ込まれて、とにかく卒業することはできた」という（55頁）。続いて大変に興味深い叙述があるので、そのままを抜き出してみる。

> 「よく頑張ったな。また勉強したいか」瓜生寅は、見違えるほど大人びて、しかも日本人離れした風貌を備えはじめた義江に、ちょっとまぶしげな視線を投げながら言った。「中学校に行かせてください」「その気さえあれば大学まで行くがよい」上機嫌に寅が言う。義江は中学の受験勉強に入った。

義江は1911（明治44）年9月、明治学院中等部に補欠入学する。しばらくの間、家庭学校内の思斉塾から開通したばかりの山手線で通学した(56頁)。家庭学校についての記述はこの二箇所しかない。しかし、私はこの僅かの叙述から、大事なことを幾つか学んだ。

著者の家庭学校観には、明らかにその世界に疎い門外漢の偏りがある。当時の家庭学校は、名家とは正反対の家庭の子弟も多数受け入れていた。しかし、そうした見方で受けとめられ、重宝がられる風潮は実際にあった

と思う。当初から経営難にあえいでいたこの学校は、学校側で費用を負担する「給費生」の他に、受益者負担の「自費生」をも積極的に受け入れていたからである。そうしたシステムは教育的配慮からだけでなく、学校経営の安定をはかるためにも採用された。もっとも、家庭学校は孤児院ではないから、対象を貧困家庭の児童に限定する根拠はなかった。事実、多くの名家、具体的には華族、実業家、政治家、学者の子弟や彼らと縁続きの子弟が、口コミやコネで幾人も入校して来たことであろう。そこに校長留岡の、したたかな問題把握と現実感覚を見てとれなくはない。一見華麗に見える上流家庭の子育てが健全である保証など、当時も今もあるわけではないのだから。その意味で、著者の家庭学校観には教えられる所があった。

著者は「厳格な校風に押さえこまれて」という、味のある表現をしている。義江のそれまでのキャリアからすれば、いくら私立感化院だとはいえ、町中にあってしかも監獄のように物理的制約のある施設環境ではないのだから、よく二年間ももったものだと思う。卒業後の義江は、明治学院もスポーツばかりやっていて学業不振、二年半で退学処分となったし、早稲田実業、中野の聖書学院でも結局駄目だった。

名だたる不良少年を集めて教育するからには、受けとめる側にも相当の覚悟がいるに違いない。それぞれの不幸な生い立ちを熟知するだけでなく、彼らの長所短所、彼らが謀りそうな悪知恵すら手の内に入れておかねばならない。教師は行いで勝負、口数は増やさないぐらいの才覚が必要なのである。先に触れた「裸のままの先生」では、朝五時に鐘が鳴ると水風呂に入る家庭学校生活の一端が紹介されている。誰が一番に飛び込むかを競争して、真っ先に風呂場に走ったら校長が入っていた。これは生徒が一番早く入る風呂ではないか、鐘が鳴る前に先生が入っているのはインチキだ、一番になりそこなって義江は悔しがった。もっとも、彼がパンツをかなぐり捨てて、勢いよく水風呂に飛び込んだことだけは確かであろうが。晩年の義江には、先生のあの「大きい声と素晴らしい皮膚の色」が忘れられない。

義江が思斉塾から通学した、という記述はとても参考になった。留岡幸

助は、昭和初期に「塾生はのべ200〜300名に上る」と言っている。しかし、私の調査で判明した思斉塾の卒業生は、43名に過ぎない。「有為の青年で苦学生」というたてまえにこだわるならば、もう少し減ってしまう。この大きな誤差の理由は、幾つもあるように思う。義江の場合のように、卒業生の一時的な寄宿舎として使われていたこともその一つである。思斉塾は特に初期の段階で教育効果を上げたが、臨機応変、具体的なケースに即応して活用された。もともと規則を定めて運営するような、明確な形を備えた施設ではなかったのである。

この著書の後半を読むと、女性遍歴の話もさることながら、三井、大倉両財閥による要所での支援が目出つ。妻となる中上川あき子と三井との関係も当然あるが、三井も大倉も家庭学校とは深い間柄にある。藤原義江の生涯には、あまり名誉なことではないが何とか卒業した、ただ一つの“母校”の影がつきまとっていたのかもしれない。(1991.1.7記)

追記　1月17日の新聞で、この著書が今年度の直木賞に決定したことを知った。私のような読み方は到底「研究」とは言えないであろうが、変わり種の読者として、このような円熟した著書を世に送り出して頂いたことを、著者に深く感謝している。